

近畿地域の隆起線文土器に見る南九州地域からの影響

村上 昇

要 旨

奈良県山添村の桐山和田遺跡と北野ウチカタビロ遺跡は、近畿地域では数少ない縄文時代草創期の遺構と遺物が確認された遺跡である。中でも、横走隆起線の上下に連続する圧痕が残る土器については、南九州地域との繋がりが指摘されてきた。また、桐山和田遺跡の発掘調査報告書では、隆起線文土器を2期に区分し、それぞれに無文土器が伴うとされたが、隆起線文土器と無文土器の時期差を指摘する見解がある。

本稿では、改めて個体識別した上で、報告書で示された類型ごとに土器の出土層位と位置を検証した。桐山和田遺跡では隆起線文土器は2期に区分出来、無文土器とは時期差があることを再確認すると共に、無文土器にも時期差が認められた。北野ウチカタビロ遺跡においては、隆起線文土器の細分と無文土器の時期差が追認出来た。

出土土器の内、横走隆起線の上下に連続する圧痕が残る土器は逆位の土器扱いで施文されており、南九州地域の施文手法の影響が認められる。近畿地域とその周辺に類例は分布し、北野ウチカタビロ遺跡で確認された宮崎県堂地西遺跡出土例に酷似した土器の存在を考え合わせると、その影響は直接的であり、かつ、一過性のものとは考え難い。南九州地域と近畿地域およびその周辺は互いに異なる土器製作技術を用いる別個の地域であり、地域を跨いで施文手法の影響がもたらされた結果、近畿地域およびその周辺では丸底の土器を作る製作技術を維持しながら、南九州地域の施文手法を受容したと考えられる。また、近畿地域およびその周辺における施文手法の受容と変容・定着を経て、より東の地域へその影響が波及した可能性が考えられる。

キーワード：縄文時代草創期、近畿地域およびその周辺、南九州地域、土器、逆位の土器扱い

はじめに

奈良県山添村の桐山和田遺跡と北野ウチカタビロ遺跡は、近畿地域では数少ない縄文時代草創期の遺構と遺物が確認された遺跡である。中でも、隆起線文土器については南九州地域との繋がりが指摘されている。本稿では、両遺跡における土器の変遷と、当該期の近畿地域の隆起線文土器に認められる南九州地域からの影響及びその波及について検討する。

1. 研究略史と残された課題

大和高原を流れる布目川の河岸段丘上に立地する桐山和田遺跡と北野ウチカタビロ遺跡は、布目ダム建設に伴い現地発掘調査が行われた。桐山和田遺跡の調査概報では、間層(5d層)を挟み、草創期包含層(5e層)と早期遺物包含層(5a～c層)が分離されると報告された(松田・近江1989)。1990年3月開催のシンポジウムでは、調査担当者の松田真一より、同様の土層堆積は北野ウチカタビロ遺跡でも認められると報告されると共に、北野ウチカタビロ遺跡出土の連続する圧痕が残る隆起線文土器と宮崎県堂地西遺跡例(面高ほか1985)との関連が指摘された(松田1994)。翌年刊行

の北野ウチカタビロ遺跡の調査概報では、5層にパックされた自然流路から草創期の遺物が出土し、間層とされた5d層が早期と草創期の混在層と報告された(松田・近江1991)。その後、松田は、近畿地域周辺の主要資料と比較して、両遺跡の隆起線文土器を隆起線文土器群の後半段階に位置付け、これに無文土器が伴うとした(松田1998)。

2002年刊行の桐山和田遺跡報告書では、草創期から早期にかけての堆積層(5a～e層)が認識出来ない、あるいは分層が困難な地点があるとした上で、改めて5e層が草創期の包含層であるとされた(松田編2002)。また、草創期の土器は第1表のように分類された。これを基に、出土した隆起線文土器はA-2・3類とA-1類の2期に区分され、それぞれに無文土器が伴うとされた(松田2002)。この内、A-1類については南九州地域との関係性が指摘されている。また、共に胎土に顕著な繊維痕を残すA-6類とC-7類については近縁性が指摘されながらも、編年上の位置付けは保留されている。

続いて、2003年に刊行された北野ウチカタビロ遺跡の報告書(遺構編)では、草創期資料が出土した自

第1表 桐山和田遺跡発掘調査報告書の土器分類

A 類	隆起線文土器
A-1 類	横走隆起線の下に連続する圧痕が残る。
A-2 類	横走隆起線の圧痕が目立たず、口縁端部がやや外反する。垂下隆起線を伴う。
A-3 類	横走隆起線の圧痕が目立たず、口縁端部が内弯気味に外傾。
A-4 類	口縁端部よりやや下がった位置に横走隆起線を配する。口縁端部が外傾気味。
A-5 類	口縁端部より 4cm 以上下がった位置に横走隆起線を配する。口縁端部が直立する。
A-6 類	小豆状の浮文を有し、厚手で胎土に多量の繊維痕が残る。
A' 類	部位不明で分類困難なもの。
B 類	斜格子沈線文土器
C 類	無文土器
C-1 類	口縁部が緩やかに外反し、端部が尖り気味。
C-2 類	口縁部が外傾気味で、端部が小さく外反。
C-3 類	C-2 類に似るが、口縁部がより薄手で、端部を細く収める。
C-4 類	口縁部が直線的に外傾。
C-5 類	口縁端部を小さく外側に屈折。
C-6 類	口縁部が外傾し、厚手で端部を丸く収める。
C-7 類	口縁部がやや外傾し、厚手で端部を尖り気味に収める。胎土に繊維痕が顕著に残る。
C-8 類	口縁部がやや外反し、厚手で端部が平坦。

然流路を 5d 層がバックしていると報告された（松田編 2003）。

以上の隆起線文土器に無文土器が伴うという見解に対し、矢野健一は隆起線文土器の時期差を迫認した上で、隆起線文土器と無文土器との時期差を指摘する（矢野 2013）。矢野は報告書の記載から土器の個体識別を復元し、出土位置と層位から両者の時期差を導き出す。

以上を踏まえ、筆者は次の点を課題と考える。

第1点目は、隆起線文土器および無文土器の時期差の検証である。松田は出土位置の差を補完的な根拠としつつ、形態的特徴の違いと類似例の編年上の位置付けを基に桐山和田遺跡における A-1 類と A-2・3 類との時期差を想定し、それぞれに無文土器が伴うとするが（松田 2002）、矢野から疑義が示されている（矢

野 2013）。また、近縁性が指摘された A-6 類と C-7 類については、出土位置と層位の検討が十分ではない。一方、矢野は、帰属時期が草創期およびその可能性がある無文土器を抽出し一括して扱うが（矢野 2013）、無文土器の類型ごとに出土地点と層位を確認した上で、各類型の時期差を検証する必要がある。

第2点目は、他地域由来の土器の編年上の位置付けと土器製作における受容過程の解明である。特に、連続する圧痕を残す隆起線文土器について南九州地域との関連が指摘されてきたものの、断定的な判断は避けられ、広域編年上の位置付けも不明確なままである。当該資料は南九州地域の土器とは異なる点もあり、南九州地域からの影響と近畿地域における土器製作上の受容について検証が必要である。

2. 桐山和田遺跡における出土位置と層位の検証

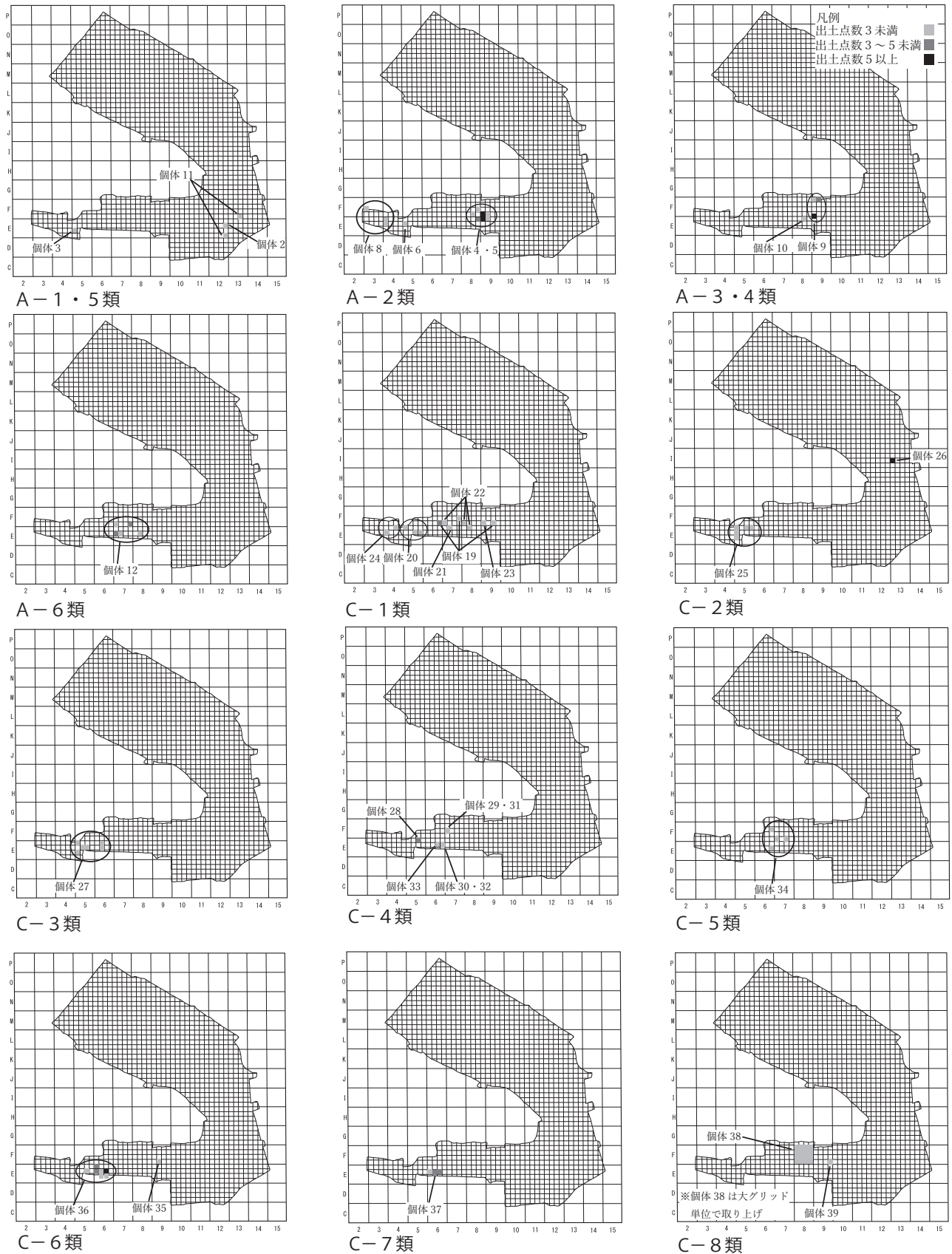
矢野が復元した個体識別（矢野 2013）を基に、改めて桐山和田遺跡出土土器の個体識別を行い（第2表）、類型別の出土地点と層位について検討する。なお、分類が不明確な A'・C' 類と早期包含層出土の B 類は対象から除く。紙面の都合から、実測図は報告書を参照願う。

まず出土層位を確認する。A-1～5 類は、一部を除いて草創期包含層と報告された 5e 層が最も下層の出土層位である。A-6 類は 5e 層からも出土するが、A-1～5 類と比較して 5c・d 層から出土する傾向が強い。C 類は類型毎に出土層位の傾向が異なる。C-3～6 類は 5e 層が最も下層の出土層位となる個体が多いが、C-1・2 類は C-3～6 類と比較して 5d 層より上層から出土する傾向が認められる。C-7 類は早期の遺物包含層から出土しており、C-8 類は全破片が 5d 層から出土している。以上から、出土層位については、5e 層から出土する A-1～5 類と C-3～6 類、5e 層よりも上層から出土する傾向が強い A-6 類と C-1・2 類、5d 層から出土する C-8 類、早期に属する C-7 類に時期区分出来る。

続いて出土位置を確認する（第1図）。調査区南部に一定の広がりをもって出土する A-6 類と C-1 類を除くと、各個体とも出土位置がまとまる傾向があり、廃棄地点から大きく移動していないと考えられる。一方、A-6 類と C-1 類は、布目川の水流を受けて廃棄地点から移動していると考えられる（矢野 2014）¹⁾。隆起線文土器の出土位置は、A-2～4 類、A-1・5 類、A-6 類のまとまりに分かれる。無文土器の出土位置は、C-2・3 類が 5E 区に、C-6・7 類が 6E 区に、C-8

第2表 桐山和田遺跡における草創期土器個体識別

個体 No.	矢野2013 の個体No.	報告書 掲載No.	分類	出土 地区	出土 層位	胎土	色調	備考	個体 No.	矢野2013 の個体No.	報告書 掲載No.	分類	出土 地区	出土 層位	胎土	色調	備考
1	1	1-21	A-1	9K12	5e	緻密	にぶい橙	試掘調査出土	22	20	121	C-1	8F1	5c,5e	やや粗	灰黄褐色	
2	2	22	A-1	12E12	5c,5e	やや粗	にぶい黄橙		22	20	122	C-1	8E14	5e	やや粗	灰黄褐色	
3	3	23	A-1?	5E5	5d,5e	緻密	褐灰色		22	20	123	C-1	7F1	5e	やや粗	灰黄褐色	
4	4	24	A-2	9E13	5e	緻密	にぶい黄橙		23	21	124	C-1	9F1	5e	やや粗	灰黄褐色	
4	4	25・32・36・ 38・40	A-2	9F1	5e	緻密	にぶい黄橙		24	22	125	C-1	4E15	5d	粗い	にぶい橙	
4	4	26・34・35	A-2	9E13	5e	緻密	にぶい黄橙		24	22	126	C-1	4E9	5e	粗い	にぶい橙	
4	4	27	A-2	9E14	5c,5e	緻密	にぶい黄橙		24	22	127	C-1	4E9	5d	粗い	にぶい橙	
4	4	28	A-2	9E13	5d,5e	緻密	にぶい黄橙		25	23	128・129	C-2	5E9	5e	やや粗	にぶい赤褐色	
4	4	29	A-2	8E16	5c,5e	緻密	にぶい黄橙		25	23	130	C-2	5E13	5e	やや粗	褐灰色	
4	4	30	A-2	9F1	5e	緻密	にぶい黄橙	正位置不明	25	23	131	C-2	5E5	5e	やや粗	にぶい赤褐色	
4	4	31	A-2	9F1	5e	緻密	にぶい黄橙	90°回転?	25	23	132	C-2	5E11	5e	やや粗	にぶい赤褐色	
4	4	33	A-2	9F13	5d,5e	緻密	にぶい黄橙		25	23	133・135	C-2	5E16	5e	やや粗	にぶい赤褐色	
4	4	37	A-2	9F13	5e	緻密	にぶい黄橙		25	23	134	C-2	5E15	5e	やや粗	にぶい赤褐色	
4	4	39	A-2	9F1	5e	緻密	にぶい黄橙	丸底に近い	26	24	136~139	C-2	1315	5d	緻密	にぶい黄橙	
4	4	43	A-2	9F1	5e	緻密	にぶい黄橙	丸底に近い	26	24	140	C-2	1315	—	緻密	にぶい黄橙	出土層位報告書に記載なし
5	5	41	A-2	9F13	5e	緻密	褐灰色	上下逆?	26	24	141	C-2	1315	5e	緻密	にぶい黄橙	
5	5	42	A-2	9F13	5d,5e	緻密	褐灰色		27	25	142	C-3	5E11	5c,5e	緻密	灰褐色	
5	5	43	A-2	9F13	5e	緻密	褐灰色		27	25	143	C-3	6E14	5e	緻密	灰褐色	
5	5	44	A-2	8E16	5d,5e	緻密	褐灰色		27	25	144・145	C-3	5E10	5e	緻密	灰褐色	
5	5	45	A-2	8F8	5e	緻密	にぶい褐色		27	25	146	C-3	5E13	5e~6	緻密	灰褐色	
5	5	47	A-2	8F3	5e	緻密	明黄褐色		27	25	147	C-3	6E10	5c,5e	緻密	灰褐色	
5	5	48・49	A-2	9F1	5e	緻密	にぶい褐色		27	25	148	C-3	5E5	5d,5e	緻密	灰褐色	
5	5	50	A-2	9E13	5e	緻密	にぶい褐色	胴部下半	28	26	149~151	C-4	5E15	5e	緻密	灰褐色	
5	5	51・52	A-2	9E13	5e	緻密	にぶい褐色		29	27	152	C-4	7F4	5a,5c	緻密	にぶい褐色	
5	5	53	A-2	8F3	5e	緻密	にぶい褐色		30	28	153	C-4	6E12	5c,5e	やや粗	にぶい橙	
5	5	54・55・58・ 59	A-2	9E13	5e	緻密	にぶい褐色		31	29	154	C-4	7F4	5c,5e	緻密	褐色	
5	5	56	A-2	9F2	5e	緻密	にぶい褐色	内面割離に一段古いナデ痕	32	30	155	C-4	6E12	5c,5e	やや粗	橙	
5	5	57	A-2	8E16	5e	緻密	にぶい褐色		33	31	156	C-4	6E11	5d,5e	緻密	褐灰色	
5	5	60	A-2	8F	攪乱	緻密	にぶい褐色		34	32	157	C-5	7F1	5e	緻密	灰黄褐色	
5	5	61	A-2	9F2	5e	緻密	にぶい褐色		34	32	158	C-5	7F3	5e	緻密	灰黄褐色	
5	5	62	A-2	8E16	5c,5e	緻密	にぶい褐色		34	32	159・161	C-5	6E12	5c,5e	緻密	灰黄褐色	
6	6	546	A-2	5E9	5e	緻密	褐灰色	垂下隆起線	34	32	160	C-5	6F12	5c,5e	緻密	灰黄褐色	
7	7	63	A-2	10N6	5c,5d	緻密	にぶい黄橙		35	33	162	C-6	9F2	5e	緻密	褐灰色	
8	8	74	A-2?	3F4	5d,5e	緻密	褐灰色	斜行する垂下隆起線	36	33	163	C-6	6E13	5e	やや粗	灰褐色	
8	8	75	A-2?	4E13	5d,5e	緻密	褐灰色		36	33	164	C-6	6E6	5a	緻密	褐灰色	
8	8	76	A-2?	4F9	5e	緻密	褐灰色		36	33	165	C-6	6E14	5e	緻密	褐灰色	
8	8	766	A-2?	4F9	5e	緻密	褐灰色		36	33	166・167	C-6	5E11	5c,5e	緻密	褐灰色	
9	8	67・68・70・ 71・74~77・ 80	A-3	9F1	5e	緻密	にぶい黄橙		36	33	168	C-6	6E9	5c,5e	緻密	褐灰色	
9	8	69・72	A-3	9F14	5e	緻密	にぶい黄橙		36	33	169・172・ 174・176	C-6	6E7	5c,5e	緻密	褐灰色	
9	8	73	A-3	9F13	5e	緻密	にぶい黄橙		36	33	170	C-6	6E9	5c,5e	緻密	褐灰色	
9	8	78	A-3	9E13	5d,5e	緻密	にぶい黄橙		36	33	171	C-6	6E13	5e	緻密	褐灰色	
9	8	79	A-3	9E14	5e	緻密	にぶい黄橙		36	33	173	C-6	6E7	5a	緻密	褐灰色	
10	9	81	A-4	8E11	5c,5e	緻密	にぶい黄橙		36	33	175	C-6	6E9	5c,5e	緻密	褐灰色	平底底部?
11	10	82	A-5	13F3	5c,5e	緻密	にぶい黄橙		37	34	177・181	C-7	6E10	5a,5c	やや粗	橙	
11	10	83	A-5	12E4	5c,5e	緻密	にぶい黄橙		37	34	178	C-7	6E10	5a	やや粗	橙	
12	11	84・85	A-6	7E9	5c,5e	緻密	にぶい黄橙		37	34	179・180・ 185	C-7	6E11	5a,5c	やや粗	橙	
12	11	86・87	A-6	7F4	5d	やや粗	にぶい黄橙		37	34	182	C-7	6E	5a	やや粗	橙	
13	11	88	A-6	7E9	5c,5e	やや粗	にぶい黄橙	縦線ない?	37	34	183	C-7	6E11	5a	やや粗	橙	
12	11	89	A-6	7E	攪乱	やや粗	にぶい黄橙		37	34	184	C-7	6E9	5c	やや粗	橙	
12	11	90	A-6	7E10	5c	やや粗	にぶい黄橙	早期包含層出土	37	34	186	C-7	6E	5a	やや粗	橙	
12	11	91-1	A-6	7F4	5c,5e	やや粗	にぶい黄橙		38	35	187~206	C-8	8F	5d	粗い	褐灰色	
12	11	91-2	A-6	8E10	5c,5e	やや粗	にぶい黄橙		39	36	207	C-8	9F4	5	緻密	にぶい褐色	
12	11	91-3	A-6	8F1	5c,5e	やや粗	にぶい黄橙		40	37	208・210・ 211・213・ 214・216~ 218	C'	13F5	5c,5e	緻密	にぶい黄橙	
13	12	92・93	A'	12E7	5c,5e	緻密	にぶい橙		40	37	209	C'	13E1	5c,5e	緻密	灰黄褐色	
13	12	95	A'	13E15	5c,5e	緻密	にぶい橙		40	37	212	C'	12F12	5c,5e	緻密	にぶい黄橙	
13	12	96	A'	12E7	5c,5e	緻密	にぶい橙		40	37	215	C'	12E7	5c,5e	緻密	にぶい褐色	
14	12	94	A'	1315	5c	緻密	にぶい橙		40	37	216	C'	12E7	5c,5e	緻密	にぶい褐色	
14	12	97	A'	13115	5c	緻密	にぶい橙		40	37	217	C'	12E7	5c,5e	緻密	にぶい褐色	
15	13	98	A'	13115	5c,5e	緻密	黒褐色		40	37	218	C'	12E7	5c,5e	緻密	にぶい褐色	
16	14	99・100	A'	4E12	5d,5e	やや粗	にぶい褐色		41	38	219・220・ 225・226・ 228~231	C'	13G3	5d'	緻密	にぶい黄橙	
16	14	101	A'	4E12	5e	やや粗	くすんだ橙		41	38	221~224・ 227	C'	13G2	5d'	緻密	にぶい黄橙	
16	14	102	A'	4E8	5e	やや粗	くすんだ橙		41	38	222~235・ 237	C'	8F2	5e	やや粗	にぶい黄橙	
16	14	103	A'	4E16	5e	やや粗	くすんだ橙		42	39	236	C'	8F2	5d	やや粗	にぶい黄橙	
17	15	104~107・ 109	A'	5E5	5d,5e	緻密	にぶい赤褐色		43	40	238	C'	5E13	5e	緻密	にぶい黄橙	
17	15	108	A'	5E9	5e	緻密	にぶい赤褐色		43	40	239・243	C'	4E16	5e	緻密	にぶい褐色	
18	16	110	B	7J16	5c	緻密	にぶい赤褐色		43	40	240	C'	5E9	5e	緻密	にぶい褐色	
19	17	111・112	C-1	6F4	5c	やや粗	灰黄褐色		43	40	241	C'	5E14	5e~6	緻密	にぶい褐色	
19	17	113	C-1	6F4	5e	やや粗	灰黄褐色		43	40	242	C'	5E15	5e	緻密	にぶい褐色	
19	17	114	C-1	9F3	5	緻密	褐灰色		44	41	244	C'	6E14	5e	緻密	にぶい黄橙	
19	17	115	C-1	6F4	5c,5e	緻密	灰黄褐色		44	41	245	C'	5E14	5e	緻密	にぶい黄橙	
19	17	116	C-1	7F8	5e	やや粗	灰褐色		44	41	246	C'	6E16	5e	緻密	にぶい黄橙	
20	18	117	C-1	5E13	5e	緻密	にぶい褐色		45	42	247	C'	8F2	5e	緻密	にぶい橙	
20	18	118	C-1	5E11	5c,5e	緻密	にぶい褐色		46	42	248	C'	8F10	5d	粗い	にぶい橙	
20	18	119	C-1	5E12	5c,5e	緻密	にぶい褐色										
21	19	120	C-1	7E14	5a,5c	緻密	にぶい褐色										



第1図 桐山和田遺跡における各類型土器の分布（松田編2002改変）

類が 8F 区にまとまるのに対し、C-4 類は 5E 区から 6E・7F 区にかけて、C-5 類は 6EF 区から 7F 区にかけて広がる。また、C-1 類の内、個体 19・22 は 6～9F 区にかけて広がる。A-6 類と C-1 類の分布が重なるものの、これを除く隆起線文土器と無文土器の分布は排他的であり、矢野が指摘するように同時期のものとは言えない（矢野 2014）。

ここで出土層位に立ち返る。5e 層から出土した A-1・5 類、A-2～4 類、C-3～6 類は互いに出土地点が異なることから、時期差が想定される。無文土器を隆起線文土器より遡る時期に位置付けることは難しいため、これらの中では C-3～6 類が最も新相に位置付けられる。残る A-1・5 類と A-2～4 類の新旧関係はどうか。静岡県大鹿窪遺跡では鹿児島県掃除山遺跡・柊ノ原遺跡・志風頭遺跡の各例に併行する土器が、本州東部の所謂「微隆起線文土器」（村上 2007b IV 期）に併行する（第 2 図 16・17、村上投稿中）。A-1 類は、逆位の土器扱い²⁾により、隆起線文を連続して摘まむことで貼付しており、後述するように堂地西遺跡例から影響を受けたものと考えられる。掃除山遺跡他の例よりも堂地西遺跡例の方が後出と考えられることと（村上 2007b）、A-2～4 類が本州東部の所謂「細隆起線文土器」（村上 2007b III 期）に相当することから、A-1 類よりも A-2～4 類の方が古く位置付けられる。ただし、A-1 類が拙稿 2007b IV 期に収まるかは検討を要する。なお、A-5 類は A-1 類の主体である個体 1 と出土位置が異なるため、両者の時期は異なる可能性が高い。

5e 層よりも上層からの出土傾向が強まる A-6 類と C-1 類は 6～8EF 区にかけて分布しており、布目川の水流の影響を受けた可能性がある。そのため、C-2 類を含め、出土地点差から時期差を導き出すことは困難である。また、小豆状の浮文が貼付されている A-6 類は、隆起線文土器とは認められない（矢野 2013）。時期差は判然としないが、A-6 類と C-1・2 類は C-3～6 類よりも後出と理解したい。

5d 層から出土する C-8 類は、A-6 類および C-1・2 類よりも新しい。早期包含層より下層で出土していることから、早期大川式新段階よりも古く位置付けられる。早期包含層より出土する C-7 類は、大川式新段階以降に位置付けられようか。

以上をまとめると、「A-2～4 類⇒A-1（・5）類⇒C-3～6 類⇒A-6 類・C-1・2 類⇒C-8 類⇒C-7 類（早期）」という新旧関係となり、A-1 類は南九州地域の堂地西遺跡例と併行する。

3. 北野ウチカタビロ遺跡出土土器の検討

北野ウチカタビロ遺跡では、草創期の遺物は自然流路 5④・⑤層を中心に出土し、部分的に確認された 5⑥層からも出土している（松田編 2003）。

5⑥層からは、桐山和田遺跡 A-2 類に相当する土器が出土している（第 2 図 1・2）。第 2 図 2 には隆起線上に左方向に進むナデ痕が残り、逆位の土器扱いによる施文と分かる³⁾。

5⑤層からは、桐山和田遺跡 A-1 類類似の土器（第 2 図 3）と、胎土に繊維痕を残す隆起線文土器（第 2 図 4）が出土している。

5④層からは、桐山和田遺跡 C-7 類に相当する、胎土に顕著な繊維痕を残す厚手の無文土器（第 2 図 5）が出土している。桐山和田遺跡 C-7 類は早期（大川式新段階以降）に位置付けられることから、5④層は早期前葉に堆積した可能性がある。

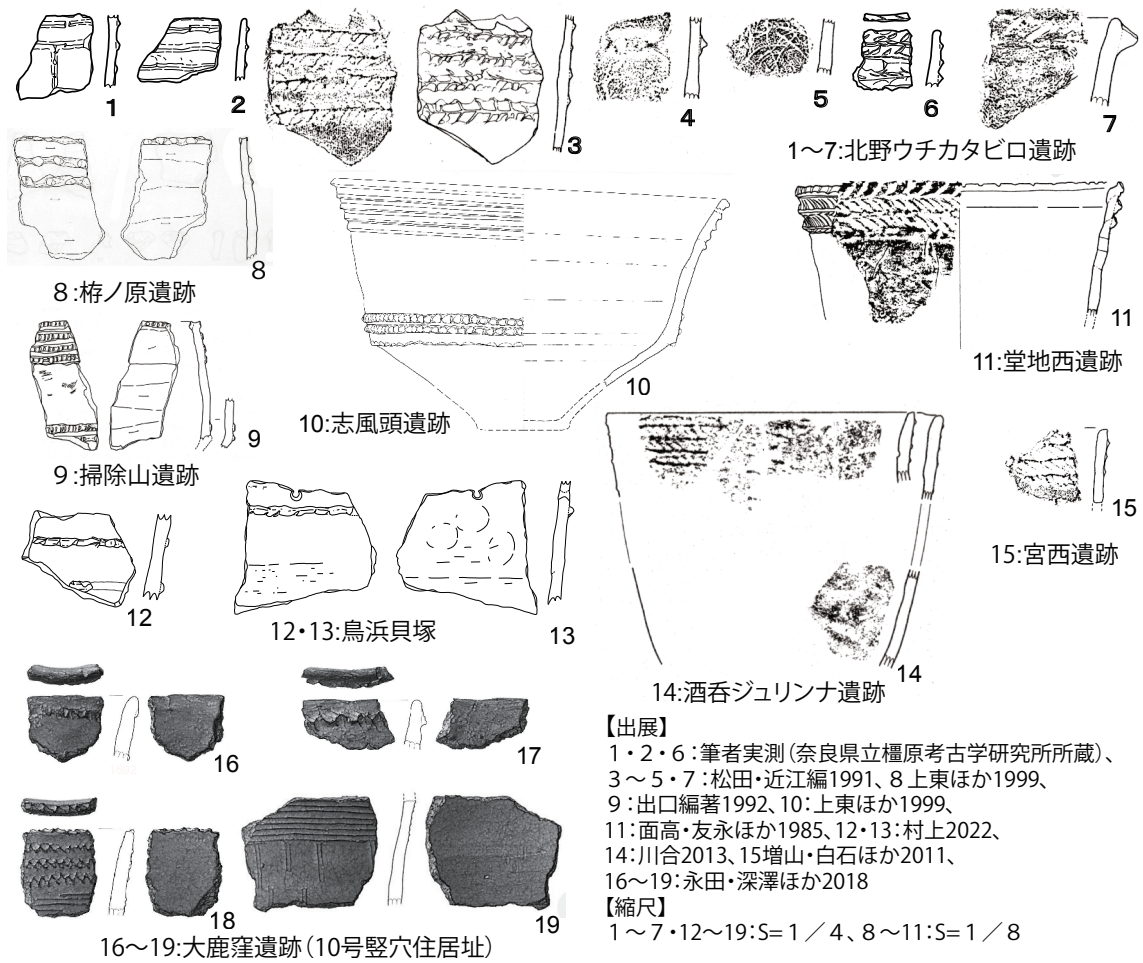
この他、遺構外の 5d 層から、逆位の土器扱いにより連続して摘まむことで貼付した隆起線を口縁部に密集させる土器が出土している（第 2 図 6）。口縁端部を肥厚させないものの、逆位の連続摘まみにより隆起線文を密着施文する点が酷似しており、堂地西遺跡例（第 2 図 11）の製作技術に精通した作り手によるものである。層位的な裏付けを欠くものの、型式学的に桐山和田遺跡 A-1 類とその類似例の祖型と考えて良い。南九州地域もしくはその近辺から近畿地域へ直接的な影響が及んだことを示す資料である。

以上から、北野ウチカタビロ遺跡土器の新旧関係は、「桐山和田遺跡 A-2 類相当（第 2 図 1・2）⇒桐山和田遺跡 A-1 類類似資料（第 2 図 3）およびその祖型（第 2 図 6）⇒桐山和田遺跡 C-7 類相当資料（第 2 図 5）」とまとめることが出来る。

4. 南九州地域からの影響の受容と波及

以上の検討結果を基に桐山和田遺跡と北野ウチカタビロ遺跡の土器を軸に編年を組むと、第 3 表のようになる。両遺跡は長期間に及ぶ集団の回帰的移動の累積により形成されたと理解されるが（光石 2001）、隆起線文土器だけではなく、無文土器についても時期差が認められる。ただし、隆起線文土器から無文土器にかけての土器の変遷、および無文土器の併行関係については、本稿では検証に至らなかった。

さて、これまで北野ウチカタビロ遺跡出土の連続する圧痕が残る隆起線文土器（第 2 図 3）および桐山和田遺跡 A-1 類には、南九州地域との関係が指摘されてきた。福井県鳥浜貝塚にも類例があることから（第



第2図 各遺跡から出土した土器 (S = 1/4・1/8)

第3表 桐山和田遺跡を軸にした併行関係

	南九州地域	近畿地域	近畿地域周辺	愛知県域	静岡県域東部	日本列島東部
隆起線文土器		桐山和田A-2・3類				村上2007aⅢ期
	掃除山				大鹿窪10号竪穴住居址	村上2007aⅣ期
	堂地西	桐山和田A-1類	鳥浜下層式	酒呑ジュリンナ、宮西		村上2007aⅣ期?
無文土器		桐山和田C-1・2類 桐山和田C-8類 桐山和田C-7類	※本表は、隆起線文土器と無文土器それぞれの併行関係を示したものである。隆起線文土器と無文土器とは、新旧関係にあるが、必ずしも、その連続性を意図しているものではない。			

2図12・13)、近畿地域とその周辺に分布すると考えられる。鳥浜貝塚例(鳥浜下層式)に対しては南九州地域との繋がりが指摘されてきたが(大塚1990など)、近畿地域の土器製作技術との関わりについては実態が不明であった。北野ウチカタビロ遺跡において堂地西遺跡例の製作技術を熟知した作り手による土器が確認され(第2図6)、同様の施文手法による類例が近畿地域とその周辺に認められることから、南九州地域からの影響は一過性のものとは考え難い。むしろ、南九

州地域から施文手法の情報がかなり直接的に持ち込まれ、これが近畿地域とその周辺で受容されたという文脈で理解出来る。ただし、桐山和田遺跡A-1類とその類例には、堂地西遺跡例と異なる点が認められる。堂地西遺跡例は丸味を帯びた平底を持つバケツ形を呈し、口縁部に逆位の連続摘まみによる隆起線文を密着させる(第2図11)。これに対し、桐山和田遺跡A-1類は丸底であり、鳥浜貝塚例は隆起線文が間隔を空けて横走する(第2図12・13)。北野ウチカタビロ遺

跡例は、間隔を空けて潰れた隆起線が横走するが、胴部からやや丸みを帯びて丸底に繋がると考えられ、器形の上では本州東部の隆起線文土器に近い（第2図3）。当該期の南九州地域において、間隔を空けて逆位の土器扱いによる連続摘まみで複数の隆起線文を横走させるのは稀であり、器形が異なることから、近畿地域とその周辺では、従来の間隔を空けて隆起線文が横走する丸底土器の製作技術も受け継いだと考えられる。つまり、南九州地域と近畿地域およびその周辺は互いに異なる土器製作技術を用いる別個の地域であり、地域を跨いで施文手法の影響がもたらされた結果、近畿地域およびその周辺では南九州地域の施文手法を受容しながらも、丸底の土器を作る製作技術を維持したと考えられる。その時期は、日本列島東部における所謂「微隆起線文土器」（村上 2007a IV期）以降に位置付けられる。

最後にさらに東へ視点を移す。隆起線の間あるいはその上を連続して押圧する土器が愛知県域に見られる（第2図14・15）。同様の施文手法は本州東部では稀なため、近畿地域で定着した隆起線を連続して摘まむ施文手法が痕跡化したものと考えられる。資料数が限られるため更なる検討を要するが、南九州地域に由来する逆位の連続摘まみによる隆起線文の施文手法が近畿地域における受容と変容・定着（桐山和田遺跡 A-1 類とその類似例）を経て、より東の地域へ波及した可能性が考えられる。

おわりに

以上、桐山和田・北野ウチカタビロ両遺跡における出土地点と層位の検証を軸に、隆起線文土器と無文土器の変遷と、隆起線文土器における地域間の影響関係と併行関係を検討した。特に、南九州地域から本州への影響は、直接的かつ大きなものだったと考えて良い。地域により土器製作技術が異なり、かつ影響し合う背景に、どのような社会の在り様を想定すべきか。課題は尽きない。

謝辞

本稿をまとめるにあたり、奈良県立橿原考古学研究所には資料の図化についてご高配頂きました。また、松田真一、岡田憲一、杉山拓己、増山禎之、長井謙治の各氏（順不同）には、ご助言とご助力を頂きました。特に記して、謝意を表します。

註

- 1) 矢野は堆積層の傾斜が変化することから、草創期から早期にかけて布目川の流路が遠ざかった可能性を指摘する（矢野 2013）。また、調査区北東部でも布目川の近くでは 5d 層の堆積が認められないため、5d 層堆積後に布目川が調査区より東側へ移動したと考えられる。遺構の集中と併せ、当時の生活の場が水辺付近であったことが窺われる。
- 2) 製作者が右利きの場合の施文作業を例に挙げると、「正位の土器扱い」は、土器を正位に据える、あるいは口縁部が向う側、底部が手前側になるように据える場合が想定される（大塚 2000）。「逆位の土器扱い」は、土器と作り手の位置関係の特定が難しいものの、土器を逆位に据える、あるいは口縁部を手前に、底部を向う側になるように据える場合などが想定される。
- 3) このため、桐山和田遺跡 A-1 類よりも前に、九州地域からの影響が近畿地域に及んでいた可能性がある。

参考文献

- 大塚達朗 1990 「隆起線紋の比較から見た九州と本州 ― 序章 ―」『縄文時代』第 1 号 縄文時代文化研究会
- 大塚達朗 1992 「縄紋草創期と九州地方」『季刊考古学』第 38 号 雄山閣
- 大塚達朗 2000 『縄紋土器研究の新展開』同成社
- 面高哲郎・友永良典ほか 1985 『浦田遺跡 入料遺跡 堂地西遺跡 平畑遺跡 堂地東遺跡 熊野原遺跡』宮崎県教育委員会
- 橿原考古学研究所編 1994 『一万年前を掘る』吉川弘文館
- 川合剛 2013 「36 酒呑ジュリンナ遺跡」『新修豊田市史 資料編考古 I 旧石器・縄文』新修豊田市史編さん委員会編 豊田市
- 永田悠記・深澤麻衣ほか 2018 『史跡大鹿窪遺跡発掘調査総括報告書』富士宮市教育委員会
- 増山禎之・白石浩之ほか 2012 『宮西遺跡 (1)』田原市教育委員会
- 松田真一 1994 「桐山和田・北野ウチカタビロ遺跡の調査成果」『一万年前を掘る』橿原考古学研究所編 吉川弘文館
- 松田真一 1998 「近畿地方における縄文時代草創期の編年と様相」『橿原考古学研究所論集』第十三 橿原考古学研究所編 吉川弘文館

松田真一 2002「桐山和田遺跡草創期の土器の様相」『桐山和田遺跡』奈良県立橿原考古学研究所
松田真一編 2002『桐山和田遺跡』奈良県立橿原考古学研究所
松田真一編 2003『北野ウチカタビロ遺跡（遺構編）』奈良県立橿原考古学研究所
松田真一・近江俊秀 1989「山添村 布目川流域の遺跡 5」『奈良県遺跡調査概報（第一分冊）1988 年度』奈良県立橿原考古学研究所
松田真一・近江俊秀 1991「山添村 布目川流域の遺跡 6」『奈良県遺跡調査概報 1990 年度』奈良県立橿原考古学研究所
光石鳴巳 2001『縄文文化の起源を探る』奈良県立橿原考古学研究所附属博物館

村上昇 2007a「日本列島東部における縄文時代草創期隆起線文土器の編年 ― 関東地域を中心に ―」『古代』第 20 号 早稲田大学考古学会
村上昇 2007b「日本列島西部における縄文時代草創期土器編年 ― 南九州地域を中心に ―」『日本考古学』第 24 号 日本考古学協会
村上昇 2022「鳥浜貝塚出土の縄文時代草創期土器の報告」『鳥浜貝塚研究』6 福井県立若狭歴史博物館
村上昇（投稿中）「駿河湾周辺地域の隆帯文土器と他地域との併行関係の検討」『立命館文学』第 691 号 立命館大学人文学会
矢野健一 2013「近畿地方における縄文草創期土器編年」『立命館大学考古学論集Ⅵ』立命館大学考古学論集刊行会